『鹿鳴館の貴婦人大山捨松』を調べる

2023 年 3 月 25 日

我部山民樹

１．はじめに

大山捨松(おおやますてまつ、旧姓・山川捨松、1860 年 3 月 16 日～1919 年 2 月 18 日)は日本の華族で教育者である。幼名はさき、のち咲子（さきこ）。**日本最初の女子留学生の一人。大学を卒業して学士号を得た最初の日本人女性。**元老となった大山巌の妻としての立場を通じ、**看護婦教育・女子教育への支援に尽力した。新 5 千円札の顔、津田梅子の生涯の盟友である。**

新政府の米国留学生

左から、永井しげ（10 歳)、上田てい（16 歳)、吉益りょう（16 歳)、津田うめ（9 歳)、山川捨松（12 歳)。1872 年、シカゴ滞在中の撮影。姓名はいずれも当時のもの、かぞえ歳。

ヴァッサー大学在学中の捨松

大山巌夫人の捨松

会津若松の生まれ。父は会津藩の国家老・山川尚江重固（やまかわ なおえしげかた）で、2 男 5 女の末娘である。さきが生まれたときに父は既に亡くなっていて、幼少の頃は父方の祖父の兵衛重英（ひょうえ しげひで）が親代わりとなった。重英は会津藩財政再建に貢献し、知行 300 石から 1,000 石に加増され、また種痘や新式銃にもいち早く理解を示した人物であった。母・えん（父の没後に出家し勝聖院）は会津藩家老・西郷氏の出身で唐衣（からごろも）の雅号を持つ会津藩屈指の歌人であった。厳格な人柄であり、子供たちには軍記物を読み聞かせ、懐剣もすぐ抜けるよう袋を短めにしていたという。

一家の運命を大きく変えたのは会津戦争だった。1868 年 8 月、板垣退助・伊地知正治らが率いる新政府軍が会津若松城に迫ると、数え 8 歳のさきは家族と共に籠城し、弾薬の運搬を手伝っていたとされる。

２．さき（捨松）の家族構成

〇実家

・父：山川重固（しげかた、会津藩国家老）

・母： 艶（えん）

・兄： 浩（ひろし、陸軍少将、男爵）

日本の武士（会津藩家老）、陸軍軍人、政治家、教育者。最終階級は陸軍少将、位階勲等・爵位は従三位薫三等・男爵。陸軍省人員局長 兼 輜重局長、陸軍省総務局制規課長、高等師範学校長、貴族院議員を歴任した。

・兄： 健次郎（けんじろう、アメリカに留学、東京帝国大学総長、男爵）

会津藩出身で白虎隊士（途中離脱）として明治政府と戦ったが、後に国費で米国留学をして東京帝国大学に登用された。理科大学長、東京帝国大学総長、明治専門学校（九州工業大学の前身）初代総裁、九州帝国大学初代総長、京都帝国大学総長、旧制武蔵高等学校（武蔵高等学校長および武蔵大学の前身）校長、貴族院議員、枢密院顧問官を歴任した。東京帝国大学総長の在任期間が合計 11 年 11 か月に及び歴代総長の最長在任期間である。

・姉： 操（みさお）

明治天皇フランス語通訳兼昭憲皇太后付女官、外交官夫人の従者としてロシアに赴任し、滞在中にロシア語やフランス語を身に着け、帰国後は宮中のフランス語教師や侍従を勤めた）

・姉： 二葉（ふたば）

長年にわたって女子高等師範学校（現在の御茶ノ水大学）で舎監（しゃかん、寄宿舎で、寄宿している学生・生徒の生活指導や監督をする人）を勤め、寄宿生たちから絶大な信頼を集めた。）

〇婚家

・夫： 大山巌（いわお、元老、元帥・陸軍大将、侯爵）

・長女／義娘： 信子（のぶこ、徳富蘆花の小説・『**不如帰**』の浪子のモデル）

・次女／義娘： 美津子（みつこ、夭折）

・三女／義娘： 芙蓉子（ふよこ）

・四女／義娘： 留子（とめこ、『**鹿鳴館の貴婦人**』の著者・久野明子の祖母）

・五女： 久子（ひさこ）

・長男： 高（たかし、海軍少尉候補生、練習航海中の事故で殉職）

・六女： 永子（ながこ、流産）

・次男： 柏（かしわ、考古学者、戊辰戦争研究家、公爵、妻は近衛文麿の妹・武子）

・孫：梓（海軍主計士官、広島大学教授・歴史学者、柏の長男）

・孫：桂（海洋生物学者、柏の次男）

3．主な出来事

年度	主な出来事

1860 年	・山川さき（のち、山川捨松、結婚後大山捨松）、生まれる。
1868 年	・会津戦争で会津城に家族と共に籠城する。会津藩が降伏後、時期が不明だがフランス人の家庭に引き取ってもらい、後にアメリカ人宣教師に預けられた。（*1）
1871 年 満 11 歳	・兄・山川健次郎、ジャパン号でアメリカ合衆国コネチカット州ニュウヘイブンに官費留学する。 ・11 月 12 日、山川捨松はアメリカ号でアメリカ合衆国コネチカット州ニュウヘイブンに官費留学する。（*2）母・「えん」が懐剣を渡し、「今生では二度と会えるとは思っていないが、**捨てたつもりでお前の帰りを待って（松）いる」と述べ「捨松」と改名させた**のはこの時である。 ・捨松は会衆派（キリスト教のプロセスタントの一教派で、他に組合派ともいう）の牧師レナード・ベーコン宅に寄宿し、そこで 4 年近くを一家の娘同様に過ごして英語を習得した。この**ベーコン家の 14 人兄妹の末娘が、捨松の生涯の親友の一人となるアリス・ベーコン**である。(*3) ・11 月 13 日、大山巌(のちに捨松と結婚する)も横浜港を経ってジュネーブへ留学。
1876 年	・捨松はベーコン牧師により、キリスト教の洗礼を受ける。(*3)
1878 年	・捨松、**ヴァッサー大学普通科**に入学する。 「サムライの娘」スティマツは、すぐに学内の人気者となった。**捨松は英文学を専攻し、たびたび学内誌に寄稿するなど、成績はいたって優秀だった。2 年生のときには学級委員長**となり、**創立記念日には着物を着て実行委員長**を務めている。得意科目は生物学だったが、日本が置かれた国際情勢や内政上の課題にも明るかった。シェイクスピア研究会やフィラレシーズ会にも入会している。(*3)
1881 年	・この年に廃止される開拓使より、10 年の留学期間が満了することによる帰国命令が出たが、後 1 年で学士号を取

満 21 歳	得できる見通しの捨松、後 1 年で高校卒業資格を取得できる見通しの津田梅子は 1 年間の延長を要請し、認められた。(*3) ・永井繁子は、この年の 6 月にヴァッサー大学音楽科（3 年制）を卒業しており、開拓使の命令に従って、この年の 10 月に帰国した。
1882 年	**・学年 3 番目の通年成績で「偉大な名誉」(magna cum laude)の称号**を得て卒業した（**大学を卒業して学士号〈Bachelor of Arts〉を取得した最初の日本人女性**）。卒業式に際しては**卒業生総代（10 人）の一人に選ばれ**、卒業論文『イギリスの対日外交政策』をもとにした講演を行い、**ニューヨーク・タイムズが「完璧なまでにイギリスの保守主義政策を理解し、アメリカの自由と友愛の精神に対して惜しみない賛辞を送っている」と論評**し、地元新聞シカゴ・スタンダードでも称賛された。(*3) ・11 月 22 日、捨松が帰国する。捨松は、日本に帰国するにあたり、**盟友であるアリス・ベーコンを日本に招き、津田梅子の助力を得て、日本に女子のための学校を設立したい、という夢**を持っていた。自分の学校を作れなかったとしても、東京女子師範学校（後の女子高等師範学校、東京女子高等師範学校、現：お茶の水女子大学）で教職に就けるだろうと考えていた。しかし、**帰国した捨松に対して、日本政府が仕事を提供することはなかった。**(*4) ・12 月 1 日、繁子と瓜生外吉は、恋愛結婚して「**瓜生繁子」（うりゅうしげこ）**となった。外吉は大日本帝国海軍士官に任官され、結婚当時は海軍大尉だった。
1883 年 満 23 歳	11 月 8 日、大山巌（満 41 歳）と山川捨松との婚儀がおごそかに行われ、一カ月後に**鹿鳴館で夫妻の結婚披露宴が行われた。披露宴招待状は全文がフランス語で書かれた**物で人々を仰天させたという。
1883 年	日本の外務卿・井上馨による欧化政策の一環として鹿鳴館が建設された。

	・外務大臣井上馨が国賓や外国の外交官を接待するため、外国との社交場とするために鹿鳴館を建設した。鹿鳴館を中心にした外交政策を「鹿鳴館外交」、欧化主義が広まった明治 10 年代後半を「**鹿鳴館時代**」と呼ぶ。 そのような中、**捨松は英・仏・独語を駆使して**、時には**冗談を織り交ぜながら諸外国の外交官たちと談笑する**。**12 歳の時から身につけていた社交ダンスのステップは堂に入った**ものだった。当時の日本人女性には**珍しい長身と、センスのよいドレスの着こなし**も光っていた。そんな伯爵夫人・捨松のことを、人はやがて「**鹿鳴館の華**」と呼んで感嘆するようになった。（*5．）
1884 年	・6 月 12 日から 3 日間にわたって日本初のチャリテイーバザー「鹿鳴館慈善会」を開いた。(*6) ・捨松、伊藤博文の依頼により下田歌子とともに**華族女学校**（後の学習院女子中・高等科）**の設立準備委員**になり、津田梅子やアリス・ベーコンらを教師として招聘するなど、その整備に貢献している。
1898 年	・順調に輝く人生を手に入れた捨松は、当然不幸に見舞われる。捨松を継母のモデルにした徳富蘆花の小説『不如帰』により世間から誹謗中傷される。(*7)
1900 年	・捨松、**津田梅子が女子英学塾（後の津田塾大学）を設立することになると、瓜生繁子ともにこれを全面的に支援した。アリスも日本に再招聘して、今度は自分たちの手で、自分たちが理想とする学校を設立**した。(*8)
1916 年	夫・巌が 75 歳で薨去すると。捨松は公の場にはほとんど姿を見せず、大山家の資産運用などに専念することとなった
1919 年 59 歳	・津田梅子が病に倒れて女子英学塾が混乱すると、捨松は自らが先頭に立ってその運営を取り仕切った。病気療養を理由に津田は退任を決め、捨松は紆余曲折を経てその後任を指名した。

	・2 月 17 日、世界各国で流行していたスペインかぜを患っていたが、回復することなく 58 歳で没した。

晩年、開墾にあたった栃木県西那須野に、夫と共に眠っている。墓石には、「従一位大薫位侯爵大山巌夫人薫四等捨松乃墓」とある。

*1．会津若松城に籠城

1868 年）8 月、板垣退助・伊地知正治らが率いる新政府軍が会津若松城に迫ると、**数 8 歳のさきは家族と共に籠城し、弾薬の運搬を手伝っていた。女性たちは焼玉式焼夷弾が場内に着弾すると一斉に駆け寄り、これに濡れた布団をかぶせて炸裂を防ぐ「焼玉押さえ」という危険な作業**をしており、さき自身がこの作業にあたったという説も存在するが、子孫で歴史ライターの大山格は、**小児のさきにそのような重いものを持ち上げられるはずはないことを根拠に、事実ではないとしている。**

若松城攻撃の際に、当初官軍の砲兵隊長をつとめていたのは、のちに夫となる薩摩藩出身の大山弥助（のちの大山巌）だったが、初日に負傷し翌日後送されており、実際に若松にいたのは 2 日のみである。

*2．官費留学

アメリカ視察旅行から帰国した北海道開拓使の次官黒田清隆は、数人の若者をアメリカに留学生として送り、未開の地を開拓する方法や技術など、北海道開拓に有用な知識を学ばせることにした。黒田は西部の荒野で男性と肩を

並べて、汗をかくアメリカ人女性にいたく感銘を受けたようで、留学生の募集は当初から「男女」若干名という例のないものとなった。

開拓使のこの計画は、やがて政府主導による**10年間の官費留学**という大がかりなものとなった。**女子留学生は、この年出発することになっていた岩倉使節団に随行して渡米する**ことが決まった。山川さきの留学生応募に先立ち、留学生に選抜された若者の一人が、山川さきの兄・山川健次郎（1871年～1876年、アメリカに国費留学）である。健次郎をはじめとして、**戊辰戦争で賊軍の名に甘んじた東北諸藩の上級士族の中には、この官費留学を名誉挽回の好機ととらえ、教養のある子弟を積極的にこれに応募させた**のである。その一方で、女子の応募者は皆無だった。女子に高等教育を受けさせることはもとより、**そもそも10年間もの間、うら若き乙女を単身異国の地に送り出すなどということは、とても考えられない時代だったのである。**

しかし、山川さき（捨松）は利発で、**フランス人家庭での生活を通じて西洋式の生活習慣にもある程度慣れていた**。また、いざという時はやはり**留学生として渡米する兄の健次郎を頼りにできる**だろうという目論見もあって、女子留学生の**再募集**があった際に、山川家では満11歳になっていた**さき（捨松）を思いきって応募させることにした**。この時も応募者は低調で、**さき（捨松）を含めて5人、全員が旧幕臣や賊軍**（官軍の対語）**の娘で、全員が合格となった。**

5人の女子留学生

・静岡県士族　永井久太郎養女　しげ　文久元年（1861）3月20日生まれ

満10歳8か月（のち、永井繁子）
・東京府貫族士族　津田仙弥女　うめ　元治元年（1864）12月3日生まれ

満6歳11か月（のち、津田梅子）
・青森県士族　山川与七郎妹　捨松　安政七年（1860）1月23日生まれ

満11歳10か月（山川捨松）
・東京府貫族士族外務中録　上田畯女　悌　安政二年（1855）生まれ

満16歳（のち、上田悌子）
・東京府貫族士族同府出仕　吉益正雄女　亮　安政四年（1857）生まれ

満14歳（のち、増田亮子）
（上田悌と吉益亮については、その正確な生年月日は不明とある。）

5人の女子留学生のうち、すでに思春期を過ぎていた年長の2人は異文化での生活に順応できなくて、病気を理由にその年のうちに帰国した。逆に**年少**

の捨松、永井しげ（繁子）、津田うめ（梅子）の 3 人は異文化での暮らしにも無理なく順応していった。**この 3 人は後々までも親友として、また盟友として交流を続け、日本の女子教育の発展に寄与**していくことになる。

*3. 渡米生活

・捨松はすでにアメリカに渡っていた兄の山川健次郎の知人の仲介で、コネチカット州ニューヘブンの会衆派の牧師レナード・ベーコン宅に寄宿し、そこで 4 年近くを一家の娘同様に過ごして英語を習得した。

・ヴァッサー大学に進んだ。永井しげが専門科である音楽学校を選んだのに対し、この頃までに英語をほぼ完璧に習得していた捨松は通常科大学に入学した。

・捨松は英文学を専攻し、たびたび学内誌に寄稿するなど、成績はいたって優秀だった。2 年生のときには**学級委員長**となり、創立記念日には着物を着て**実行委員長**を務めている。得意科目は生物だったが、官費留学生としての強い自覚を持っていたようで、日本が置かれた国際情勢や内政上の課題にも明るかった。シェイクスピア研究会やフィラレシーズ会にも入会している。

・1882 年 6 月 14 日、学年 3 番目の通年成績で「偉大な名誉」（*magna cum laude*）の称号を得て卒業した（大学を卒業して学士号〈Bachelor of Arts〉を取得した最初の日本人女性）。卒業式に際しては**卒業生総代（10 人**[17]**）の一人**に選ばれ、卒業論文『イギリスの対日外交政策』をもとにした**講演を行い**、ニューヨーク・タイムズが「完璧なまでにイギリスの保守主義政策を理解し、アメリカの自由と友愛の精神に対して惜しみない賛辞を送っている」と論評し、地元新聞シカゴ・スタンダードでも称賛された。

*4. 日本政府が仕事を提供しなかった理由

捨松は、日本に帰国した時点では日本語を概ね忘れていた。帰国時点での**捨松の日本語能力は「簡単な日常会話ができる程度」**であり、**読み書きは全くできなかった。**そして捨松はヴァッサー大学本科で一般教養（Liberal arts）を学んだのみで、**専門知識・専門技能と呼べるものを持っていなかった。**

*5. 捨松の結婚

・捨松は英語学者の神田乃武から縁談の申し出を受けるが、にべもなく断ってしまう。捨松が、結婚相手として好ましい条件を備えていた、神田との縁談を断った明確な理由は判らない。

・大山巌が捨松に初めて会ったのは、増田孝邸で行われた永井繁子と瓜生外吉の結婚披露宴の余興で「ベニスの商人」を捨松が演じていたときとも、同じく益田邸で梅子らとともに捨松がテニスをしている姿であったともいう[1]。いずれにせよ**大山は一目で恋に落ちる**。自他共に認める西洋かぶれだった大山は、**パリのマドモワゼルをも彷彿とさせる捨松の洗練された美しさ**にすっかり心を奪われてしまった。

・大山からの縁談の申し入れを受けた長兄の山川浩は、仇敵・薩摩人との縁談が旧会津藩士に与える悪い印象を与えることを恐れ、また上司に当たる巌との縁組が出世のために妹を差し出したと言われることを恐れ、即座に断ってしまう。しかし大山も粘った。吉井から山川家に断られたことを知らされると、今度は従弟の西郷従道が山川家に訪れて徹夜で説得にあたった。兄・浩の「**山川家は賊軍の家臣ゆえ**」という逃げ口上も「**大山も自分も逆賊（西郷隆盛）の身内**」という従道には通じなかった。従道が連日説得にあたるうちに、断りきれなくなった浩は本人の意志を聞くこととした。

・これを受けた捨松は「(大山）閣下のお人柄を知らないうちはお返事もできません」とデートを提案し、結婚は親同士が決める時代、ましてや女の方からの結婚前の交際を要求することなど、西郷には理解できなかった。落胆して巌に伝えると、巌は大喜びで応じるという。

捨松は、初めのうちは**大山の強い薩摩弁がさっぱりわからず、巌も片言の会津弁をしゃべる捨松の言葉が理解できなかったが、フランス語で話し始めるととたんに会話がはずんだ。**2 人には親子ほどの歳の開きがあったが、デートを重ねるうちに捨松は大山の心の広さと茶目っ気のある人柄に惹かれていった。**交際を初めてわずか 3 ヵ月で、捨松は大山との結婚を決意した。**

・この頃アリスに書いた手紙には捨松は、「いろいろ考えた末結婚することにします。**私がつける仕事はなさそう**だし、それならば**彼と結婚してその立場から女性のためになにかできるのではと思うのですが（後略）」「たとえどんなに家族から反対されても、私は彼と結婚するつもりです**」と記している。

・しかし、**会津戦争と西南戦争で因縁を重ねた会津人と薩摩人の婚姻は、郷里の人々にとって受け入れられるものではなかった**。二人の曾孫大山格は結婚披露宴以降、**大山家は薩摩と会津の両方とも親戚づきあいが絶えた**としている。

大山巌

鹿鳴館時代の大山捨松

*5. 鹿鳴館の華

鹿鳴館（ろくめいかん）は、1883 年に日本の外務卿・井上馨による欧化政策の一環として建設された西洋館である。

国賓や外国の外交官を接待するため、外国との社交場として使用された。鹿鳴館を中心にした外交政策を「鹿鳴館外交」、欧化主義が広まった明治 10 年代後半を「**鹿鳴館時代**」と呼ぶ。

日本が、不平等条約改定のために文明国であることを示すという涙ぐましい努力があったのだが、そうした「鹿鳴館外交」の評判は必ずしも良いものではなかった。外交官たちはうわべでは宴を楽しみながらも、文書や日記などには日本人の「滑稽な踊り」の様子を詳細に記して彼らを嘲笑していたのである。**体格に合わない燕尾服や窮屈な夜会服に四苦八苦しながら、真剣な面持ちで覚えたてのぎごちないダンスに臨む日本政府の高官やその妻たちの姿が、特筆せざるを得ないほど可笑しいものだったのも無理はなかった。**

その中で、一人水を得た魚のように生き生きとしていたのが捨松だった。流暢な**英・仏・独語を駆使して、時にはジュークを織り交ぜながらどの国との外交官たちとも会話を楽しむ。**12 歳の時から身につけていた**社交ダンスの軽**

やかなステップは堂に入ったものだった。当時の日本人女性には珍しい 176 センチの長身で、洋装がよく似合った。

誰ともなく、**「鹿鳴館の貴婦人」**、**「鹿鳴館の華」**、**「鹿鳴館の女王」**と呼ぶようになった。

*6．鹿鳴館慈善会

ある時、有志共立東京病院を見学した捨松は、そこに看護婦の姿がなく、病人の世話をしているのは雑用係の男性が数名であることに衝撃を受ける。そこで元海軍軍医総監で院長の高木兼寛男爵に自らの経験を語り、患者のためにも、そして女性のための職場を開拓するためにも、日本に看護婦養成学校が必要なことを説き、高木にその開設を提言した。高木も看護婦の必要性は早くから認めていたが、いかんせん財政難で実施が難しい状況だった。

1884 年 6 月 12 日から 3 日間にわたって捨松は日本初のチャリテイーバザー「鹿鳴館慈善会」を開いた。捨松は品揃えから告知、そして販売にいたるまで、率先して並みいる政府高官の妻たちの陣頭指揮をとった。3 日間の開催で、入場者数 1 万 2 千人を数えた。来場者には、慈善運動だから“お釣り”はでないというも、捨松の情熱に快く応じた。目標の 1 千円をはるかに越え、病院がいくつも出来るほどの 8 千円を上回る利益を上げた。全額を、有志共立東京病院に寄付した。行動力も、素晴らしい女性であった。政府の**要人と結婚したことで、捨松自身が直接かかわることは出来なくなっていた**が、女子教育への熱意は冷めることなく、生涯にわたって**裏方として支援**をし続けている。この資金をもとに、2 年後には**日本初の看護婦学校・有志共立病院看護婦教育所**が設立された。

*7．徳富蘆花の小説『不如帰』と捨松の風評被害

大山巌は先妻との間に娘が 3 人いた。長女の信子は結核のため 20 歳で早世したが、彼女をモデルとした徳富蘆花の小説が、**「ああ、人間はなぜ死ぬのでしょう! 生きたいわ! 千年も万年も生きたいわ!」の名ゼリフ**が当時の流行語にまでなったベストセラー『不如帰』である。

蘆花によれば、この小説はある女性が蘆花に話したことが元になっている。蘆花の夫人愛子によると、この女性は大山巌の副官の未亡人福家安子であり、信子が肺結核のため三島彌太郎と離縁されたこと、彌太郎が離婚を悲しんだこと、巌が怒って信子を引き取り邸内に療養室を建てて療養させたこ

と、最後に家族旅行を行ったこと、信子の葬儀の際に三島家から送られた花を突き返したことなどが述べられたという。

小説の中で**主人公の浪子は結核をわずらうと、夫との幸せな結婚生活を姑によって引き裂かれ、実家に戻される。すると今度は薄情な継母に疎まれ、父が建ててくれた離れで寂しくはかない生涯を終える。**ところが読者には、**この小説に描かれた冷淡な継母のモデルは捨松だと信じて嫌悪感を抱いた者**が多く、誹謗中傷の言葉を連ねた匿名の投書を受け取ることすらあったという。舞台作品が制作されるとその公開に捨松は抗議しており、晩年までそうした風評に悩んでいたという。

実際は小説とは異なり[]、看護師としての経験から対策を知っていた捨松が、家族への感染を防ぐため生活空間を分けたものであり、隔離した信子に対しては献身的に看護している。巌が日清戦争の戦地から戻ると、信子の小康を見計らって‘親子 3 人水入らず’で関西旅行までしている。捨松は巌の連れ子たちからも「ママちゃん」と呼ばれて慕われていた。**家庭は円満で、実際には絵に描いたような良妻賢母だった**という[]。

しかし蘆花がこの件に言及したのは『不如帰』を出版してから 19 年を経た 1919 年、捨松が急逝する直前のことだった。雑誌『婦人世界』で盧花は「『不如歸』の小説は姑と継母を悪者にしなければ、‘人の涙をそゝる’ことが出來ないから誇張して書いてある」と認めた上で、捨松に対しては「お氣の毒にたえない」と述べている。

*8. 女子英学塾

1900 年に**津田梅子が女子英学塾（後の津田塾大学）を設立することになると、捨松は瓜生繁子ともにこれを全面的に支援した。**アリスも日本に再招聘して、今度は自分たちの手で、自分たちが理想とする学校を設立したのである。

教育方針に第三者の容喙（ようかい、口出し）を許さないという立場から、津田が誰からの金銭的援助もかたくなに拒んでいたこともあり、捨松も繁子もアリスもボランティアとして奉仕した。**捨松は学校資金募集にあたる委員会会長を務め、英学塾では顧問から後に理事や同窓会長を務め、梅子の渡米中には校長代理として卒業証書を渡すなど、積極的に塾の運営にも関与している。**生涯独身で、パトロンもいなかった津田が、民間の女子英学塾であれ

だけの成功を収めることが出来たのも、捨松らの多大な支援が大きな理由のひとつだった。

女子英語塾の設立申請者

理事（2 名）: 大山捨松、津田梅子

社員（6 名）: 阿波松之助、巌本善治、上野榮三郎、桜井彦一郎、
元田作之進、新渡戸稲造

４． 盟友・津田梅子と瓜生繁子、そしてアリス・ベーコン

左から梅子、アリス・ベーコン、繁子、捨松

（１）津田梅子（つだうめこ、『津田梅子を調べる』を参照）

日本初の女子留学生の一人で、ワシントン D.C. 近郊の受―ジタウンに住むチャールズ・ランマン家に寄宿し、その後 11 年間をアメリカで過ごし、アーチャー・インスティチュート女学校を卒業した。帰国後は、女子英学塾（現：津田塾大学）を創設し、日本における女子教育の先駆者と評価される。また、欧米の学術雑誌に論文が掲載された最初の日本人女性である。

2024 年に新しくなる日本銀行券の 5,000 円札の図柄に選ばれた。

（２）瓜生繁子（うりゅうしげこ）

江戸幕府の外国方に務める益田鷹乃助の四女として江戸・湯島猿飴横町（現：東京都文京区湯島）に生まれ、7 歳で幕府の軍医であった永井玄栄の養女となった。

日本発の女子留学生の一人で、名家であるアボット家に寄宿し、その後の 10 年間をアメリカで過ごすこととなる。

アボット家は繁子を家族同様に慈しみ、同家の未婚の娘であるミス・エレン・アボット（繁子が預けられた当時は 30 代半ばだった。繁子は「ネリーおばさんと終生慕った。）が母親代わりとなった。

15 歳になった 1876 年、後に結婚する瓜生外吉と知り合って恋仲となった。外吉は既に熱心なクリスチャンであった。繁子が寄宿するアボット家と親しいコネチカット州ニューヘブンのピットマン家に寄宿して、アナポリス海軍兵学校への進学を目指していた。二人は、1881 年に帰国する時点では、既に婚約していた。

繁子はヴァッサー大学の学内コンサートに何度も出演してピアノ演奏や声楽歌唱を披露し、好評を博した。**日本最初のピアニスト**と言われている。

繁子は帰国するも、他の女子留学生同様、日本語が不慣れな上に、儒学の価値観が色濃く残る日本においては、活躍できる場は乏しかったが、結婚後に東京音楽学校の教授としてのキャリアを継続しながら、4 男 3 女を産み育てた。これは外吉の理解と協力があったからこそ可能になったことである。さらに 1886 年には官立東京高等女学校の教授も兼任することとなった。1890 年に東京高等女学校が女子高等師範学校（現：お茶の水女子大学）へ吸収合併されると、教授に任じられて高等官に列し、正七位に叙された。翌年には在職していた東京音楽学校（現：東京芸術大学音楽学部）でも教授に昇格した。これによって繁子は、両校で音楽と英語の 2 科目を担当することとなり、多忙を極めた。

1893 年に東京音楽学校の教授を辞任して女子高等師範学校の専任となったが、1902 年には女子高等師範学校の教授も辞任し、以後は家庭に専念することとなった。日本における西洋音楽の先達として、揺籃期の学校で 10 年間もの長きにわたって教鞭を執った繁子は、幸田延（こうだのぶ）などの後進を育成した。

幸田延はピアニスト、ヴァイオリニスト、音楽教育家、作曲家で、妹のヴァイオリニストである安藤幸（あんどう こう）と共に、日本における本格的音楽家の草分けとされている。

津田梅子が女子英学塾（後の津田塾大学）を設立することになると、瓜生繁子は捨松とともにこれを全面的に支援した。

なお、夫・外吉は 1875 年にアメリカに留学、1877 年 9 月にアナポリス海軍兵学校に入学し、1881 年、同校を卒業し、同年 11 月に海軍中尉任官、最終階級は海軍大将になった人物である。

(3) アリス・ベーコン

アメリカ人人女性教育者。

捨松に日本に招聘された教育者。『日本の内側』、その後に著した『日本の女性』（日本語訳題『明治日本の女たち』）は明治時代の日本の女性事情を偏見無く書いた史料として貴重である。『日本の女性』の前書きには「生涯の友人・大山捨松に捧げる」という一文が添えられ、捨松とは死ぬ直前まで文通を交わしていた。

・生い立ち

父はコネチカット州ニューヘブンの牧師であったレオナルド・ベーコン、母はキャサリン。キャサリンは後妻で、アリスは 14 人兄弟の末娘であった。

少弁務使として赴任していた森有礼（もりありのり、初代文部大臣）が、日本から来た女子留学生の下宿先を探していたが、父・レオナルドは森の申し出に応じて山川捨松を引き取った。レオナルド夫妻は捨松を娘同様に扱い、特に年齢の近かったアリスとは姉妹のように過ごした。

アリスは地元の高校ヒルハウス・ハイスクールを卒業したものの、経済的な事情で大学進学を諦めた。しかし 1881 年に、**ハーバード大学の学士検定試験に合格して学士号を取得**し、1883 年にハンプトン師範学校正教師となる。

・日本へ

1884 年に大山捨松や津田梅子の招聘により、華族女学校（後の学習院女学校）の英語教師として来日する。来日中の 1 年間の手紙をまとめたものを 1894 年**『日本の内側』**（日本語訳題『華族女学校教師が見た明治日本の内側』）として出版し、反響を呼ぶ。帰国後はハンプトン師範学校校長となったが、1900 年 4 月、大山捨松と津田梅子の再度の招聘により女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）と津田梅子が同年に創設した女子英学塾（現・津田塾大学）の英語教師として来日した。**女子英学塾では無報酬で教師を務め、梅子と同様に塾に住み込んで塾に「家賃」を支払い、資金難に苦しんでいた塾の経営を助けた。**1902 年 4 月に任期満了でアメリカに帰国した。

・帰国後

帰国後も教育に身を捧げ、一生独身であった。ただし、渡辺光子と一柳満喜子という**2人の日本女性を養女とした**。一柳満喜子（ひとつやなぎまきこ）は女子英学塾の教師になることを期待されたが、帰国後ウィリアム・ヴォーリズ（アメリカ合衆国に生まれ、日本で数多くの西洋建築を手懸けた建築家、社会事業家）と結婚した。

5. 大山巌（おおやま いわお、1842年11月12日～ 1916年12月10日）

・経歴

薩摩藩士・大山綱昌（彦八）の次男として生まれた。幼名は岩次郎。通称は弥助。同藩の有馬新七らに影響されて過激派に属したが、1862年の寺田屋騒動では公武合体派によって鎮圧され、大山は帰国謹慎処分となる。薩英戦争に際して謹慎を解かれ、砲台に配属された。ここで西欧列強の軍事力に衝撃を受け、幕臣・江川英龍の塾にて、黒田清隆らとともに砲術を学ぶ。

明治政府では陸軍大臣（初代・第3代）、陸軍参謀総長（第4・6代）、大警視（第2代）、文部大臣（臨時兼任）、内大臣（第4代）、元老、貴族院議員を歴任した。

称号・階級は元帥陸軍大将。栄典は従一位大勲位功一級侯爵。

西郷隆盛・従道兄弟は従兄弟。

・留学

1869年、渡欧し普仏戦争などを視察。1870年から1873年の間はジュネーブに留学した。

・西南戦争

西南戦争をはじめ、相次ぐ士族反乱を鎮圧した。西南戦争では政府軍の指揮官（攻城砲隊司令官）として、城山に立て籠もった親戚筋の西郷隆盛を相手に戦ったが、**大山はこのことを生涯気にして、二度と鹿児島に帰ることはなかった。**ただし西郷家とは生涯にわたって親しく、特に西郷従道とは親戚以上の盟友関係にあった。

・日清日露戦争

日清戦争では陸軍大将として第2軍司令官となった。1899年5月16日には参謀総長に就任し、また元帥に列せられた。

1903 年 6 月 22 日、参謀総長として朝鮮問題解決に関する意見書を内閣に提出した。日露戦争（1904 年-1905 年）では元帥陸軍大将として満州軍総司令官を務め（1904 年 6 月 20 日）、日清日露ともに日本の勝利に大きく貢献した。同郷の東郷平八郎と並んで「**陸の大山、海の東郷**」と称された。

・元老

大山は陸軍を代表する存在であり、最重要の重臣である元老のメンバーとしても活動した。ただし、大山は陸軍内の意向に従う傾向があり、黒田清隆・西郷従道没後は会議内のバランスをとるためしばらく元老会議のメンバーから外されている。1915 年 4 月 23 日には内大臣となり、宮中入りした。

・薨去

1916 年、大正天皇に供奉し、福岡県で行われた陸軍特別大演習を参観した帰途に、胃病から倒れ、胆嚢炎を併発。療養中の 12 月 10 日に内大臣在任のまま薨去。享年 75。

6. さいごに

明治維新から、わずか 4 年後の 1871 年。5 人の少女がアメリカに渡った。その中に当時 12 歳の山川咲子、のちの大山捨松がいた。激動の明治時代にあって初の女子留学生としてアメリカで 11 年間を過ごし、日本が急激な西洋化政策をとる中、日本人女性の進むべき道を切り開き続けた女性である。捨松は政府の要人の妻であることから直接に係ることができなかったが、女子教育に情熱を持ち続け、生涯にわたって裏方として女子教育に貢献した。

「鹿鳴館の名花」と謳われ、日本の西洋化のためにありったけの情熱を注いだ大山捨松を主人公にした新たなドラマを見てみたいものだ。ヴァッサー大学の卒業式で堂々と講演する捨松の姿や鹿鳴館で颯爽とステップを踏む捨松の姿が思い浮ぶ。

参考資料

・ウイキペディア

・大山捨松の略歴/偉人伝/会津への夢街道

以上